Japanese Journal of Applied Psychology
1998, No. 24, 9-17

原　著

# 幼児用社会性尺度の作成

沢　宮　容　子*

# Construction of a social scale for preschool children

Yoko SAWAMIYA

The purpose of this study is to construct a social scale for preschool children, and to examine its reliability and validity. For this purpose, using the questionnaires refered to the scale devised by Tagami (1991), protectors of 1940 preschool children attending a total of 28 preschools were surveyed. A factor analysis revealed three factors, and three subscales were established, including attack / disturbance scale, leadership / assertion scale, and friendship scale. Those subscales were developed into a social scale for preschool children consisting of 16 items. The analysis results confirmed the reliability and validity of the social scale for preschool children as for preschool children aged two to five years.

**key words**: construction of the scale, reliability and validity, preschool child, a social scale.

## 問　題

他人との交渉を回避する子ども，いじめなどの攻撃行動を起こす子ども，あるいは学校でリーダー役を務めることに拒否反応を示す子ども―。社会性に問題のある子どもたちの増加が，教育の現場はもちろん，心理学，社会学，精神医学など，多分野の人々の注目を集めている。

社会性とは，繁多によれば，「最も広義には，その社会が支持する生活習慣，価値規範，行動基準などにそった行動がとれるという全般的な社会的適応性をさす」が，「最も狭義には，他者との円滑な人間関係を営むことができるという対人関係能力に限定して使われる」[5]。本研究では，この後者の定義に従う。

社会性の未熟な子どもたちが増加している背景には，子どもたちが大勢の仲間たちと遊びながら自然に社会性を身につけていくことを困難にさせる時代環境の変化がある。時代環境の変化とは，具体的にいうと，地域社会の養育機能の弱体化，「親の子育て意識の変容」にともなう親の養育能力の低下などのことである[11,13]。

また，Hoffmanによれば，「現在の生活状況に対する満足度など親の心理的要因が，子どもの発達に少なからず影響を及ぼしている」[6]。たとえば親が強い心理的ストレスにさらされている場合，そのストレスは子どもの発達に望ましからぬ影響を与えるということである。「子どもの発達はすなわち社会

* 足利短期大学
Ashikaga junior college

化の過程である」[8] が，その社会化が行われにくい状況が生まれているということができるだろう。

ところで子どもの社会性という問題を考える上で，特に注目すべきは幼児期である。すでに「幼児期の段階で示される対人関係の不適応は，成人となってからの社会的不適応につながる」からである[1,2,12]。そこで，このような社会的不適応からあらかじめ免れるために，「幼児の社会性を育てる」ことの重要性が改めて指摘される[19] ようになった。

幼児の社会性を育てるには，幼児の社会性を測定する必要がある。幼児の社会性を測定するには，信頼性と妥当性をもつ質問紙を使った第三者による評定と，それに観察を組み合わせた指標が最も有効である。しかし，観察法を組み合わせた指標は，多数の幼児を対象とするには限界がある。

そこで，本研究では，幼児の社会性を簡便に測定できる幼児用社会性尺度を作成し，その信頼性と妥当性を検討することとする。

## 調査1　幼児用社会性尺度の作成および信頼性の検討

### 目的

幼児用社会性尺度を作成し，その信頼性を検討する。

### 方法

**被験者**　公立・私立の幼稚園・保育園，合わせて全28園に在籍する幼児1940人の保護者。全対象園児の構成は，Table 1 に示したとおりである。

**材料**　田上の作成した尺度をもとに，幼児の遊びや対人的かかわりに関する33項目の記述から成る質問紙を作成し，使用した[16]。各項目に対する回答は，“はい”，“？”，“いいえ”の3件法によった。集計にあたっては，順に1点，2点，3点と得点化した。

**Table 1**　対象となる園児の構成

| | 男児(%) | 女児(%) | 合計(%) |
|---|---|---|---|
| 1 歳 児 | 57 ( 2.9) | 52 ( 2.7) | 109 ( 5.6) |
| 2 歳 児 | 102 ( 5.3) | 70 ( 3.6) | 172 ( 8.9) |
| 3 歳 児 | 145 ( 7.5) | 132 ( 6.8) | 277 ( 14.3) |
| 4 歳 児 | 203 ( 10.5) | 212 (10.9) | 415 ( 21.4) |
| 5 歳 児 | 304 ( 15.7) | 281 (14.5) | 585 ( 30.2) |
| 6 歳 児 | 200 ( 10.3) | 182 ( 9.4) | 382 ( 19.7) |
| 合計 (%) | 1011 ( 52.1) | 929 (47.9) | 1940 (100.0) |

教示された文章は以下のとおりである。「あなたのお子さんの現在の様子についてお答えください。次の項目にあてはまるときには『はい』，あてはまらないときには『いいえ』を○で囲んでください。なお，どうしても決められないときには『？』を○で囲んでください」。

**手続き**　1993年10月～1994年2月，上記の質問紙を実施した。

### 結果と考察

#### (1) 項目の抽出

1歳児から6歳児までの対象園児は1940人。各項目に対する「はい」「いいえ」の出現率は Table 2 に示したとおりである。1歳児の結果を見ると，10.0％以下の項目が5項目，そして90.0％以上の項目が1項目と大きく偏っているため，以後の分析の対象からはずすこととした。また今回は特に，年齢・性差を等質とするために，2歳児から6歳児まで各年齢ごとに男女60人ずつ無作為に抽出し，計600人を分析の対象にした。

因子分析に先だって，① 平均が1.15以下，2.85以上の項目を削除，② 2歳児から6歳児にわたっての出現率の変化が5％以下の項目を削除，③ 項目間相関 .70 以上で項目内容が類似している場合には一方の項目を削除，という基準を設け，33項目の内，結果的に12項目を削除した。

#### (2) 因子分析による尺度項目の分析

因子分析は，共通性の推定値として重相関係数の2乗値（SMC）を使用し，主因子法によって因子を抽出。その後バリマックス回転を行い，3因子（固有値は，3.25，1.94，1.73で，寄与率はそれぞれ15.46％，9.23％，8.23％，累積寄与率は32.92％）を抽出した。

因子分析の結果は Table 3 に示したとおりである。以下，因子負荷量が .40 に満たない5項目（「遊び友だちの数が多い」「ひとり遊びよりも友だちと遊ぶ方を好む」「他の子の世話をやく」「親から離れて遊びに行くことができる」「自分が負けても，おこったりさわいだりしない」）が削除され，残る16項目について解釈を行った。

第1因子に高い因子負荷量を示したのは8項目（「他の子の遊びをじゃまする」「友だちのおもちゃを横取りする」「他の子をおしのけて自分のやりた

**Table 2**　各項目に対するはいといいえの出現率（%）

| | 項　　目 | | 全　体 | 1歳児 | 2歳児 | 3歳児 | 4歳児 | 5歳児 | 6歳児 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | (*N*=1940) | (*N*=109) | (*N*=172) | (*N*=277) | (*N*=415) | (*N*=585) | (*N*=382) |
| 1 | 友だちとなかよく遊ぶ | 1. はい | 94.0 | 71.2 | 89.5 | 96.4 | 94.9 | 96.4 | 96.4 |
| 2 | 友だちのおもちゃを横取りする | 3. いいえ | 67.2 | 22.0 | 25.1 | 47.8 | 74.5 | 80.4 | 84.7 |
| 3 | 人の前に出るとひどくはずかしがる | 3. いいえ | 57.5 | 65.5 | 56.5 | 54.0 | 57.6 | 56.3 | 59.9 |
| 5 | ブランコの順番を守れる | 1. はい | 81.7 | 24.5 | 55.8 | 77.8 | 86.1 | 91.6 | 93.0 |
| 6 | 自分のものを友だちといっしょに使うのをいやがる | 3. いいえ | 75.2 | 40.0 | 52.3 | 60.7 | 77.7 | 85.8 | 87.0 |
| 7 | 他の子をおしのけて自分のやりたいことをする | 3. いいえ | 75.6 | 44.5 | 46.2 | 65.7 | 80.3 | 82.9 | 88.7 |
| 8 | ひとつの遊びが長く続かない | 3. いいえ | 74.0 | 66.7 | 65.7 | 70.0 | 74.9 | 77.1 | 77.2 |
| 9 | ちょっとしたことで、すぐめそめそする | 3. いいえ | 57.6 | 60.9 | 58.1 | 59.9 | 52.3 | 58.0 | 59.7 |
| 10 | 遊びで他の子をさしずする | 1. はい | 26.2 | 0.9 | 12.9 | 25.5 | 26.5 | 29.3 | 34.8 |
| 11 | 自分のものと人のものとを区別してあつかえる | 1. はい | 82.3 | 28.8 | 54.7 | 74.9 | 89.2 | 92.0 | 93.5 |
| 12 | 友だちといっしょに砂遊びができる | 1. はい | 94.4 | 63.1 | 86.0 | 95.3 | 97.8 | 97.4 | 98.2 |
| 13 | 自分で見たり聞いたりしたことを話す | 1. はい | 90.1 | 20.9 | 78.9 | 96.4 | 94.9 | 96.2 | 95.8 |
| 14 | 遊び友だちの数が多い | 1. はい | 57.0 | 24.8 | 50.0 | 54.9 | 54.4 | 60.5 | 68.1 |
| 15 | 自分から進んで遊びをはじめる | 1. はい | 87.3 | 92.8 | 90.1 | 90.6 | 86.0 | 85.3 | 86.5 |
| 16 | 他の子の遊びをじゃまする | 3. いいえ | 81.9 | 49.5 | 53.8 | 73.3 | 87.5 | 89.2 | 92.4 |
| 17 | 友だちの持っているおもちゃを何でもほしがる | 3. いいえ | 69.0 | 51.4 | 52.0 | 53.6 | 70.7 | 76.7 | 78.9 |
| 18 | 友だちが近づいてくるとさける | 3. いいえ | 93.5 | 79.6 | 90.1 | 95.7 | 93.7 | 94.7 | 95.6 |
| 19 | 友だちといっしょにままごとやお店ごっこができる | 1. はい | 89.8 | 37.6 | 72.8 | 96.4 | 93.7 | 94.5 | 96.1 |
| 20 | かけっこやゲームのとき、人に勝とうとする | 1. はい | 57.3 | 4.6 | 14.0 | 52.2 | 61.9 | 67.6 | 74.5 |
| 21 | ひとり遊びよりも友だちと遊ぶ方を好む | 1. はい | 71.6 | 35.5 | 50.6 | 64.4 | 74.6 | 79.4 | 81.3 |
| 22 | 友だちに自分のおもちゃを貸すことができる | 1. はい | 86.9 | 50.0 | 71.5 | 81.8 | 90.4 | 93.7 | 94.0 |
| 23 | 他の子の世話をやく | 1. はい | 59.7 | 21.3 | 47.1 | 63.4 | 59.8 | 63.8 | 67.4 |
| 24 | 親からはなれて遊びに行くことができる | 1. はい | 84.1 | 60.6 | 74.9 | 77.6 | 83.9 | 89.7 | 91.2 |
| 25 | おもちゃをゆずりあって使う | 1. はい | 75.0 | 29.4 | 47.4 | 63.9 | 78.6 | 85.4 | 88.3 |
| 26 | おもちゃの使い方を他の子どもに教える | 1. はい | 74.2 | 4.5 | 27.3 | 66.4 | 81.5 | 88.0 | 91.6 |
| 27 | かくれんぼのきまりがわかる | 1. はい | 66.6 | 4.5 | 16.9 | 45.7 | 66.5 | 85.8 | 92.5 |
| 28 | 友だちの話すのをだまって聞く | 1. はい | 57.5 | 22.9 | 31.6 | 49.6 | 62.1 | 65.1 | 68.1 |
| 29 | ひとり遊びだけしかしない | 3. いいえ | 97.1 | 84.5 | 94.8 | 98.6 | 98.1 | 97.9 | 98.2 |
| 30 | 自分が負けてもおこったりさわいだりしない | 1. はい | 32.2 | 21.3 | 40.7 | 32.6 | 29.6 | 30.7 | 36.6 |
| 31 | 友だちが自分のおもちゃなどをいたずらするとおこる | 3. いいえ | 24.7 | 50.9 | 14.0 | 14.9 | 24.0 | 27.8 | 31.7 |
| 32 | 遊びのきまりを変えたり、新しく作ったりする | 1. はい | 44.1 | 9.1 | 18.6 | 31.5 | 45.7 | 50.7 | 62.9 |
| 33 | 自分の思ったとおりにならないとあたりちらす | 3. いいえ | 50.2 | 33.6 | 32.7 | 36.4 | 48.3 | 58.5 | 62.1 |
| 34 | ひとりで熱中して遊ぶことができる | 1. はい | 90.3 | 85.5 | 89.0 | 90.6 | 91.1 | 90.4 | 90.9 |

いことをする」「自分のものと人のものとを区別してあつかえる」「ブランコの順番が守れる」「友だちの持っているおもちゃを何でもほしがる」「自分の思ったとおりにならないとあたりちらす」「友だちの話すのをだまって聞く」)。これらは，“攻撃・妨害性”因子と命名した。

第2因子に高い因子負荷量を示したのは5項目(「おもちゃの使い方を他の子どもに教える」「かけっこやゲームのとき，人に勝とうとする」「かくれんぼのきまりがわかる」「遊びで他の子にさしずする」「遊びのきまりを変えたり新しく作ったりする」)。これらは“指導・主張性”因子と命名した。

**Table 3** 幼児用社会性尺度の因子分析結果，各下位尺度のα係数ならびに各項目のI-T相関

| 質問項目 | 第1因子 | 第2因子 | 第3因子 | I-T相関 |
|---|---|---|---|---|
| 《攻撃性・妨害性因子》 | | | | |
| ＊16 他の子の遊びをじゃまする | −0.71 | 0.01 | −0.07 | 0.70 |
| ＊2 友達のおもちゃを横取りする | −0.69 | −0.13 | 0.01 | 0.72 |
| ＊7 他の子をおしのけて自分のやりたいことをする | −0.63 | 0.10 | 0.17 | 0.68 |
| 11 自分のものと人のものとを区別してあつかえる | 0.55 | 0.28 | −0.15 | 0.63 |
| 5 ブランコの順番が守れる | 0.49 | 0.30 | −0.12 | 0.56 |
| ＊17 友だちの持っているおもちゃを何でもほしがる | 0.48 | 0.13 | 0.12 | 0.60 |
| ＊33 自分の思ったとおりにならないとあたりちらす | 0.44 | 0.11 | 0.25 | 0.60 |
| 28 友だちの話すのをだまって聞く | 0.43 | 0.14 | −0.14 | 0.56 |
| 《指導・主張性因子》 | | | | |
| ＊26 おもちゃの使い方を他の子どもに教える | 0.33 | 0.59 | −0.35 | 0.75 |
| ＊20 かけっこやゲームのとき，人に勝とうとする | 0.09 | 0.55 | −0.10 | 0.66 |
| ＊27 かくれんぼのきまりがわかる | 0.47 | 0.51 | −0.24 | 0.72 |
| ＊10 遊びで他の子にさしずする | −0.10 | 0.48 | −0.14 | 0.60 |
| ＊32 遊びのきまりを変えたり，新しく作ったりする | 0.17 | 0.46 | −0.19 | 0.70 |
| 30 自分が負けても，おこったりさわいだりしない | 0.22 | −0.33 | −0.07 | |
| 21 ひとり遊びよりも友だちと遊ぶ方を好む | −0.03 | 0.29 | −0.29 | |
| 《友好性因子》 | | | | |
| ＊25 おもちゃをゆずりあって使う | 0.34 | 0.21 | −0.62 | 0.80 |
| ＊22 友だちに自分のおもちゃを貸すことができる | 0.29 | 0.05 | −0.51 | 0.71 |
| 6 自分のものを友だちといっしょに使うのをいやがる | −0.30 | 0.07 | 0.43 | 0.78 |
| 24 親から離れて遊びに行くことができる | 0.04 | 0.09 | −0.37 | |
| 23 他の子の世話をやく | 0.03 | 0.25 | −0.37 | |
| 14 遊び友だちの数が多い | 0.01 | 0.18 | −0.35 | |
| 固有値 | 3.25 | 1.94 | 1.73 | |
| 寄与率（%） | 15.46 | 9.23 | 8.23 | |
| 累積寄与率（%） | 15.46 | 24.69 | 32.92 | |
| 尺度を構成した際のα係数 | .78 | .71 | .63 | |

＊は逆転項目

第3因子に高い因子負荷量を示したのは3項目（「おもちゃをゆずりあって使う」「友だちに自分のおもちゃを貸すことができる」「自分のものを友だちといっしょに使うのをいやがる」）。これらは“友好性”因子と命名した。

分布にかたよりのある項目を除外したことによって，田上の研究では，“共有性”，“社交性”，“指導性”，“集中性”，“表出性－非主張性”の5因子であったものが，ここでは3因子にまとめられたわけである[16]。

ここで，Table 3に示した第1因子8項目，第2因子5項目，第3因子3項目のそれぞれについて下位尺度を作成し，以後の分析を行った。

**(3) 信頼性の検討**

下位尺度得点の平均（標準偏差）はそれぞれ，攻撃・妨害性尺度が11.76 (3.60)，指導・主張性尺度

**Table 4**　幼児用社会性尺度の下位尺度間相関

| | 攻撃性・妨害性尺度 | 指導・主張性尺度 |
|---|---|---|
| 指導・主張性尺度 | −0.34*** | |
| 友好性尺度 | −0.48*** | 0.34 |

*** $p$<.001

が 11.20 (2.79)，友好性尺度が 8.04 (1.45) であった。

また，下位尺度ごとのα係数は，それぞれ .78，.71，.63 であり，十分な内的一貫性が得られた。なお，友好性尺度のα係数が .63 とやや低いのは，この尺度の項目数が3項目と少ないためであると考えられる。

年齢段階別に下位尺度ごとのα係数を求めたところ，2歳児はα = .57～.73，3歳児はα = .60～.76，4歳児はα = .58～.62，5歳児はα = .52～.70，6歳児はα = .28～.58 であった。2歳児から5歳児に関しては，十分な内的一貫性のあることがわかる。なお，6歳児におけるα係数がいずれの下位尺度においても低いのは，天井効果が働いたためだろう。これらの結果から，本尺度の測定対象は5歳児以下にすることが望ましいと考えられる。

各項目のI－T相関は Table 3 に示したとおりである。I－T相関は，ほとんどが .6 以上という良好な結果が得られた。

さらに，弁別力のある項目を選択するために，16項目について，全被験者の得点分布から上位33.3％の上位群と下位33.3％の下位群を抽出し，G－P分析を行った。その結果すべての項目において0.1％水準で有意な差が認められた。

幼児用社会性尺度の下位尺度間相関は Table 4 に示したとおりである。いずれも $r$ = .34～.48 と中程度の相関をもち，3つの下位尺度が幼児の社会性という共通の概念を測定しながらも，それぞれが社会性の異なった側面を弁別的に測定していると考えられる。

## 調査2　幼児用社会性尺度の妥当性の検討

### 目的

調査1で作成した幼児用社会性尺度の妥当性を検討する。

妥当性を検討するために，幼児用社会性尺度とともに，外的基準である「他の子にらんぼうする（ぶつ，かみをひっぱる，かみつく)」，および「他の子とけんかをする」の2項目を加えた質問紙調査を実施する。

**(1)** これまでの研究より，「乱暴な行動」を示す子どもほど，幼児用社会性尺度の下位尺度である攻撃・妨害性が高く，友好性が低いと予測される。一方「けんか」は，自己主張や人とのかかわりを含む行為であり，攻撃・妨害性だけでなく，指導・主張性に通じると考えられる。したがって，「けんか」をする子どもほど，攻撃・妨害性，および指導・主張性が高くなると予測される。

**(2)** 年齢が高くなるにつれて，攻撃・妨害性は減少し，逆に指導・主張性，友好性は増大することが予測される。

### 方法

**被験者**　公立・私立の幼稚園・保育園に在籍する幼児600人（男児300人，女児300人）の保護者。2歳児から6歳児まで各年齢ごとに120人ずつ計600人。

**材料**　これまでの調査結果をもとに作成した計16項目から構成される幼児用社会性尺度に，外的基準である「他の子にらんぼうする（ぶつ，かみをひっぱる，かみつく)」，および「他の子とけんかをする」の2項目を加えた質問紙。

**手続き**　1993年10月～1994年2月，上記の質問紙を実施した。

### 結果と考察

#### (1) 外的基準との関連の検討

幼児用社会性尺度の下位尺度と，外的基準である「他の子にらんぼうする（ぶつ，かみをひっぱる，かみつく)」，および「他の子とけんかをする」の2項目との関連を検討する。

まず，「他の子にらんぼうする（ぶつ，かみをひっぱる，かみつく)」という項目について「はい」と答えた群と，「いいえ」と答えた群の2群を抽出し，両群の各下位尺度得点の平均値について検討した（Figure 1)。乱暴な行動を示す子どもは，予測されたとおり，攻撃・妨害性が高く，友好性が低くなっている。

年齢ごとに $t$ 検定を行った結果では，2歳児（$t$ = 5.06，$p$ < .001)，3歳児（$t$ = 5.69，$p$ < .001)，5歳児（$t$ = 2.66，$p$ < .01)，6歳児（$t$ = 3.58，$p$ < .05）にお

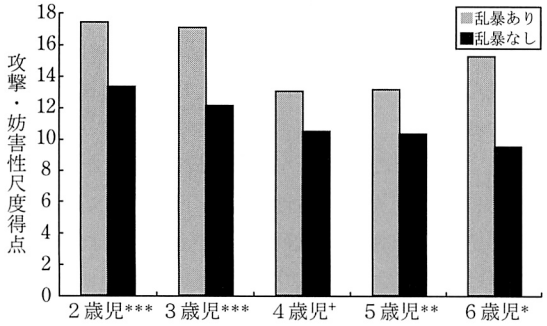


**Figure 1-1**　乱暴と攻撃・妨害性尺度

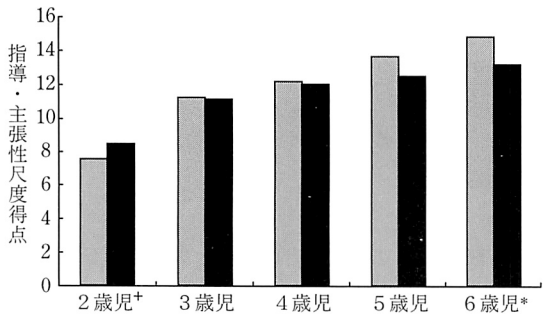


**Figure 1-2**　乱暴と指導・主張性尺度

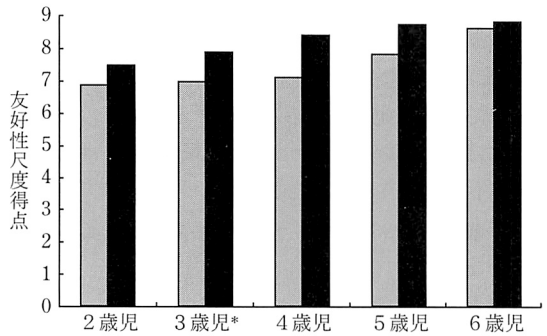


**Figure 1-3**　乱暴と友好性尺度

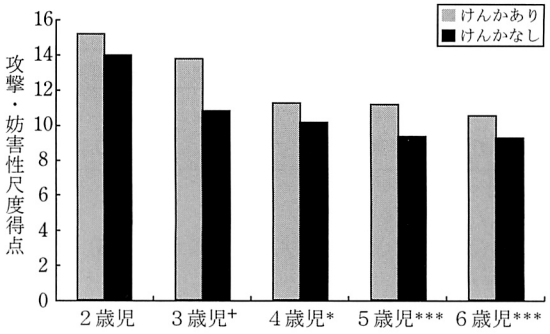


**Figure 2-1**　けんかと攻撃・妨害性尺度

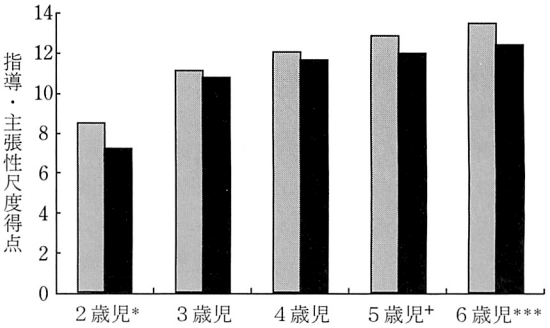


**Figure 2-2**　けんかと指導・主張性尺度

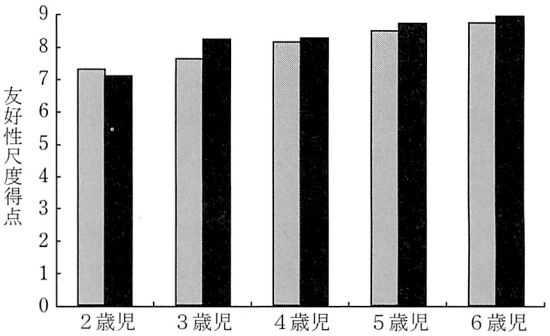


**Figure 2-3**　けんかと友好性尺度

いて，乱暴な行動を示す子どもの方が，示さない子どもよりも有意に攻撃・妨害性が高かった。また，3歳児（$t = 2.27$，$p < .05$）において，乱暴な行動を示す子どもの方が，示さない子どもよりも有意に友好性が低かった。

6歳児では乱暴な行動を示す子どもの方が，示さない子どもよりも有意に指導・主張性が高かった（$t = 2.04$，$p < .05$）が，前述したように6歳児の結果に関しては，尺度の内的一貫性に問題があることから，慎重に解釈することが必要であると考えられる。

次に，「他の子とけんかをする」という項目について「はい」と答えた群と，「いいえ」と答えた群の2群を抽出し，両群の各下位尺度得点の平均値について検討した（Figure 2）。けんかをする子どもは，予測されたとおり，攻撃・妨害性と指導・主張性が高くなっている。

年齢ごとにt検定を行った結果，4歳児（$t = 1.99$，$p < .05$），5歳児（$t = 4.14$，$p < .001$），6歳児（$t = 3.43$，$p < .001$）において，けんかをする子どもの方が，けんかをしない子どもよりも有意に攻撃・妨害性が高かった。また，2歳児（$t = 2.10$，$p < .05$），6歳児（$t = 3.49$，$p < .001$）において，けんかをする子どもの方が，けんかをしない子どもよりも有意に指導・主張性が高かった。なお，けんかをする子どもとけんかをしない子どもとの間には，友好性にお

いて有意な差は見られなかった

けんかとは，「子ども同士のコンフリクトをともなうコミュニケーション」[10] であるため，指導・主張性を発揮しようとすれば，コンフリクトを生みやすくなり，その結果，けんかが多くなると解釈することもできる。そのような意味では，けんかは肯定的な側面をもつものでもあり，子ども同士の間で生じるこのような対人葛藤が，「社会的・認知的発達，社会言語習得を促す場となる」という Shantz & Hobart の指摘とも一致している[14]。妥当な結果といえるだろう。

**(2) 年齢差の検討**

各下位尺度の年齢的変化は，予測されたとおり，年齢が高くなるにつれて攻撃・妨害性は減少し，指導・主張性，友好性は増大する傾向のあることが明らかになった（Figure 3）。

幼児期においては，「社会的問題の解決手段が攻撃行動から言語行動へと徐々に比重を移す」こと[15]，あるいは自己調整能力の発達にともなって，「叩く・押すなどの身体的攻撃や，言語的な手段を用いずに物を取り返すなどの行動が減少する」こと[20]が，本研究でも証明されたといえるだろう。「加齢にともなって，互いに活動的で一貫した協力を行うようになる」という Damon の指摘とも一致している[3]。

この後さらに，下位尺度ごとに年齢と性を要因とする分散分析を行った。性別・年齢別の各下位尺度得点の平均および分散分析結果は Table 5 に示したとおりである。

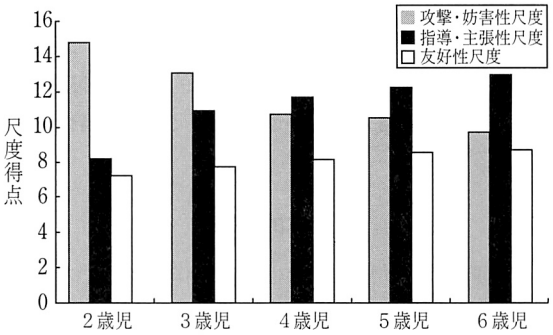


**Figure 3** 各下位尺度の年齢的変化

年齢ごとの性差をみてみると，男児は女児よりも攻撃・妨害性が高かった。特に，3歳児（$F = 11.13$, $df = 1/118$, $p < .01$）と4歳児（$F = 9.04$, $df = 1/118$, $p < .01$）において有意な差がみられた。

また，3歳児（$F = 12.04$, $df = 1/118$, $p < .001$）において，女児は男児よりも有意に指導・主張性が高く，3歳児（$F = 6.01$, $df = 1/118$, $p < .05$）と4歳児（$F = 11.18$, $df = 1/118$, $p < .01$）において，女児は男児よりも有意に友好性が高かった。

これらの結果は，女性の性役割と深い関連をもつ「自己抑制が，3歳代から女児の特性として認められる」という柏木の指摘[9]や，幼児は「3歳から4歳にかけて性の識別が可能となり，性的なラベリングを行うようになる」という従来の研究における指摘と一致する（たとえば[4, 18]など）。また，「女児の方が男児よりも成熟度が高い」こと[17]と関係づけ

**Table 5** 性別×年齢別の下位尺度得点の平均および分散分析結果（上段が全体、中段が男児、下段が女児）

| 下位尺度 | 2歳児 全体 男児 女児 | 3歳児 全体 男児 女児 | 4歳児 全体 男児 女児 | 5歳児 全体 男児 女児 | 6歳児 全体 男児 女児 | 分散分析結果 性の主効果 $df$=1 | 年齢の主効果 $df$=4 | 交互作用 $df$=4 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 攻撃・妨害性尺度 (RANGE: 8.00～24.00) | 14.75 | 13.08 | 10.74 | 10.47 | 9.77 | *** | *** | |
| | 15.27 | 14.18 | 11.43 | 10.77 | 9.90 | 19.64 | 56.74 | 1.83 |
| | 14.23 | 11.98 | 10.05 | 10.17 | 9.63 | | | |
| 指導・主張性尺度 (RANGE: 5.00～15.00) | 8.18 | 10.87 | 11.74 | 12.26 | 12.95 | | *** | * |
| | 7.83 | 10.10 | 11.67 | 12.45 | 12.82 | 1.01 | 47.92 | 2.37 |
| | 8.52 | 11.63 | 11.82 | 12.07 | 13.08 | | | |
| 友好性尺度 (RANGE: 3.00～9.00) | 7.22 | 7.65 | 8.13 | 8.50 | 8.70 | ** | *** | |
| | 7.12 | 7.30 | 7.73 | 8.60 | 8.62 | 17.91 | 15.99 | 1.52 |
| | 7.32 | 8.00 | 8.53 | 8.40 | 8.78 | | | |

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

て解釈することも可能である。

これらの結果は，予測された年齢的変化，および説明可能な性差を示しており，外的基準との関連についての検討結果と合わせて，本尺度の妥当性を確認するものといえよう。

## 全体的考察

本研究は，幼児用社会性尺度を作成すること，およびその信頼性と妥当性を検討することを目的としている。

調査1における尺度項目の選定過程では，主因子法による因子分析の後，バリマックス回転を行い，3因子が抽出された。3因子は，“攻撃・妨害性”因子，“指導・主張性”因子，“友好性”因子，と命名され，それぞれ下位尺度が作成された。これらは幼児の社会性の下位構造であると想定される。本尺度の信頼性については，内的一貫性を検討することによって確認し，2歳から5歳に関しては満足な結果が得られた。

調査2においては，外的基準との関連，年齢差，および性差の検討を行った結果，予測どおり，あるいは説明可能な結果が得られ，本尺度の妥当性が確認された。

これらの結果から，2歳児から5歳児において，本尺度は実用に耐えうる信頼性と妥当性をもつことが明らかになった。本尺度は，項目数が16項目と少なく，項目内容も平易で理解しやすい。そのため，対象者への負担が軽く，実施しやすいという特徴をもっている。

残された課題は，下位尺度間の項目数にバランスをもたせることである。妥当性を検討するにあたっては，より広い視野に立つことが必要だろう。今回は外的基準として「乱暴な行動」と「けんか」という2項目を取り上げているが，他の項目との関連についても検討してみたい。また，「構成概念妥当性は，最終的にはテスト結果と実際に現れた行動との関係によって確かめられるべきである」との池田の指摘もあり[7]，「行動的妥当性」を測定するという方法も考えられる。なお，「社会性」という概念はきわめて多様な側面をもつものであるが，本尺度は限られた側面を測定しているにすぎない。尺度を使用するにあたっては，この点を考慮する必要があるだろう。

## 文　献


1) Cohen, A. S., & de Van Tassell, E. A. A comparison of partial and complete paired comparisons in sociometric measurement of preschool groups. *Applied Psychological Measurement*, 1978, **2**, 31-40.

2) Cowen, E. L., Pederson, A., Babigian, H., Izzo, L. D., & Trost, M. A. Longterm follow up of early detected vulnerable children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 1973, **41**, 438-446.

3) Damon, W. Social and personality development. W. W. Norton, & Company, 1983.（山本多喜司編訳　社会性と人格の発達心理学　北大路書房，1990.）

4) 深谷和子　性による socialization の成立過程　一性差意識の研究（その II）東京教育大学紀要，1970, **16**, 197-213.

5) 繁多　進　社会性の発達とは 繁多　進・青柳　肇・田島信元・矢澤圭介編　社会性の発達心理学　福村出版　9-17, 1991.

6) Hoffman, L. W. Effect of maternal employment in the two-parent family. *American Psychologist*, 1989, **44**, 283-292.

7) 池田　央　妥当性　依田　新監修　新・教育心理学事典　金子書房　549-550, 1977.

8) 柏木恵子　自己制御（self-regulation）の発達　心理学評論，1986, **29** (1), 3-24.

9) 柏木恵子　幼児期における「自己」の発達　東京大学出版会，1988.

10) 荻野美佐子　コミュニケーションの発達　井上健治・久保ゆかり編　子どもの社会的発達　東京大学出版会　185-204, 1997.

11) 大石容子・乾　孝・亀谷純雄　現代における父母の子育て意識の諸相　日本応用心理学会第56回大会発表論文集，1989, 73.

12) Parker, J. G., & Asher, S. R. Peer relations and later personal adjustment : Are lowaccepted children at risk? *Psychological Bulletin*, 1987, **102**, 357-389.

13) 沢宮容子・乾　孝・亀谷純雄　現代における父母の子育て意識の諸相・その2　日本応用心理学会第57回大会発表論文集，1990, 78.

14) Shantz, C. U., & Hobart, C. J. Social conflict and development : Peers and siblings. In T. J. Berndt & G. W. Ladd (Eds.), Peer relationships in child development. New York : A Wiley-interscience Publication, 71-94, 1988.

15) 柴坂寿子　攻撃　木下芳子編　対人関係と社会性の発達　金子書房　129-172, 1992.

16) 田上不二夫　幼児期の社会性の発達とあらそい行動

日本行動療法学会第17回大会発表論文集，1991, 16-17.
17) 内田伸子　幼児心理学への招待　ー子どもの世界づくりー　サイエンス社，1989.
18) 渡辺真理子　幼児における性差意識，性役割に関する研究（その I）日本教育心理学会第19回総会発表論文集，1977, 460-461.
19) 渡辺弥生　ソーシャル・スキル・トレーニング　日本文化科学社，1996.
20) 山本愛子　幼児の自己調整能力に関する発達的研究ー幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略についてー　教育心理学研究，1995, **43**, 42-51.

**謝辞**

調査にご協力いただいた被験者の皆様，また本論文をまとめるにあたり，貴重なご助言を賜りました筑波大学田上不二夫教授，千葉大学濱口佳和助教授に心よりお礼を申し上げます。

（受付：1998. 4. 13，受理：1998. 8. 21）